

地名の由来と史跡と文化財

(五井地区編)



ふるれんネット・いちまる館でダウンロードできます

五井 大宮神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年6月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちほら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社とされていますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社とされています。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたのですが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「五井地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の五井地区の地名の由来

千葉県の名の由来

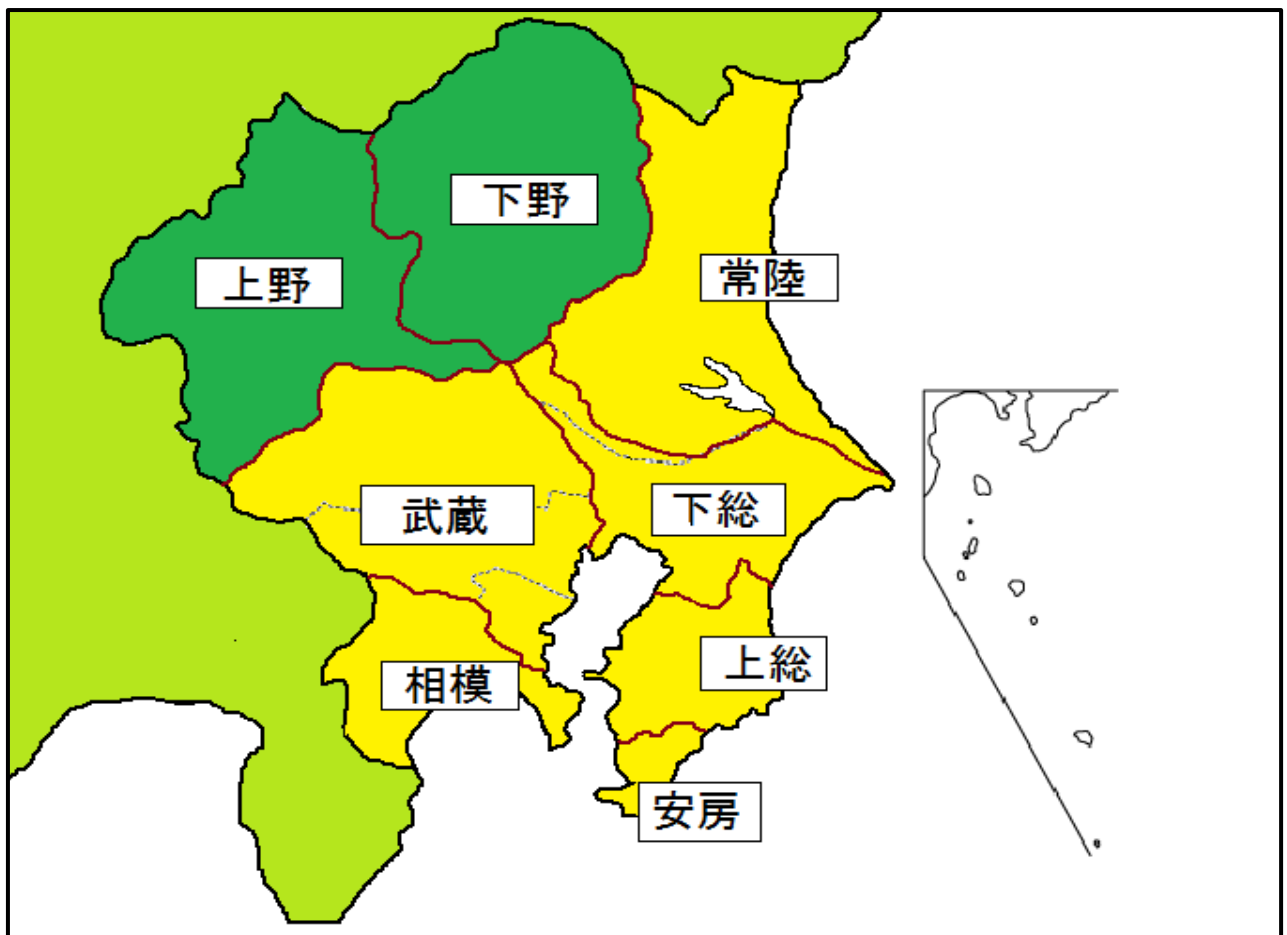
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周准（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

五井地区（岩野見・岩崎・君塚・五井・玉前・出津・平田・村上）

概説

中古、五井村、平田村は市原荘の地であり、武松藩とも称していた。また五井は「御井」「五位」等で表されていたが、後に改められたという。

君塚の白幡神社にまつわる伝記によると、日本武尊が東征の際にこの地で休憩され、農民に命令して塚に杖を立てさせたとある。このことから、部落を武の郷と称し、武の塚神と号したという。

また古墳時代には、上海上国造（姉崎中心）が置かれたことで当地区もその支配地となっていたと思われる。また律令制下に至っても上総国府、上総国分寺などと目と鼻の先に位置しており、この支配下にあったと思われる。勢力関係に加えて文化の側面からも、中央文化の受容できた地であろうと考えられる。

治承3年（1180年）源頼朝が石橋山合戦に敗れた後、安房を経て上総の国の君塚白幡神社で休み、千葉介常胤を待ったという伝説がある。また、鎌倉幕府が上総国を関東御分国に指定していることなど、この地区の持つ地理的条件などから、三浦半島や千葉介のいた下総と係わりを持つ要所と考えられていた。

天正18年（1590年）に徳川家康が関東を領した際、松平家信は五井5千石を与えられ以後4年間文禄3年（1594年）まで封している。

徳川家康は、交通の要所となる所に上級家臣を配置したと言われ、千葉県下においても松平氏を含め、それを窺うことができる。そのことで、五井が当時既に駅地として形成されていたと考えられる。

承応元年（1652年）に神尾守勝が下総国金親から五井村へ知行替えとなり、以後神尾一族の支配が続いたが享保5年（1720年）には大観野田三郎右衛門が支配することとなった。

さらに享保11年（1726年）に五井は有馬氏倫の領地となり、以後有馬氏は天保11年（1840年）まで引き継ぎ封されている。氏倫は、主要地方道千葉鴨川線の五井市街の直線道に名残を残す市街整備をしたとつたえられて、また天明元年（1726年）に氏怒は、字柳前（五井駅近く）に陣屋を設けたと伝えられている。これは伊能忠敬の沿海日記に「五井宿という場なり、有馬備後守在所」とあることにも窺える。

この時代享保12年（1727年）に、後に「岩崎新田」と名付けられた「清兵衛新田」が江戸の下村清兵衛によって開墾され、宝暦9年（1759年）には、後に「玉前新田」に改められた「見立新田」が代官吉田源之助によって開拓されている。

また、現在に残る五井大市は、万治元年（1658年）に江戸深川の釜六と釜七という金物屋によって開かれた「鍋・釜の市」が始まりと伝えられている。このようなことから五井が、この時代既に近隣から人の集まった地であったと思われる。

明治に入ると、元年（1868年）県知事柴山文平の支配となり、その後菊間藩主水野忠敬の領地となった。当寺、岩崎・玉前・出津の一部は鶴幕藩水野忠順の領地であり、明治4年（1870年）一時菊間県の管轄を経て木更津県、6年には千葉県の所轄となっている。

明治6年（1872年）に大小区分画が行われた際、5大区中、出津・岩崎新田・玉前新田は1小区に、五井平田・村上・君塚・岩野見は2小区に、村上是3小区に編入され、同9年に至って君塚が5小区に、そのほかは4小区に編入されている。

明治11年（1883年）郡区町村編制法施行によって、五井は1村で独立し、出津・岩崎新田・玉前新田は松ヶ島と、平田は村上と、君塚・岩野見は五井金杉と村連合を組織した。同17年戸長役場所轄区域の更生により、五井・出津・岩崎新田・玉前新田・平田は同一戸長役場の所轄に、また・君塚・岩野見は西野谷ほか2村と、村上是市原ほか9村と所轄区域を同じくしている。

明治22年（1889年）の市町村制施行により、五井・出津・岩崎・平田・村上・君塚及び岩野見が合併し五井村となった。新地名は五井が地域の中にあって圧倒的な大村であり、著聞した地名であった事から決定されたという。その後、同24年（1891年）町制をとって五井町となった。

昭和28年（1953年）の町村合併促進法施行によって五井町は、同29年11月3日に東海村を合併し、

さらに同30年3月20日に千種村を合併し、31日に旧千種村白塚、柏原及び今頭朝山、青柳の一部を分割し姉崎町に編入した。

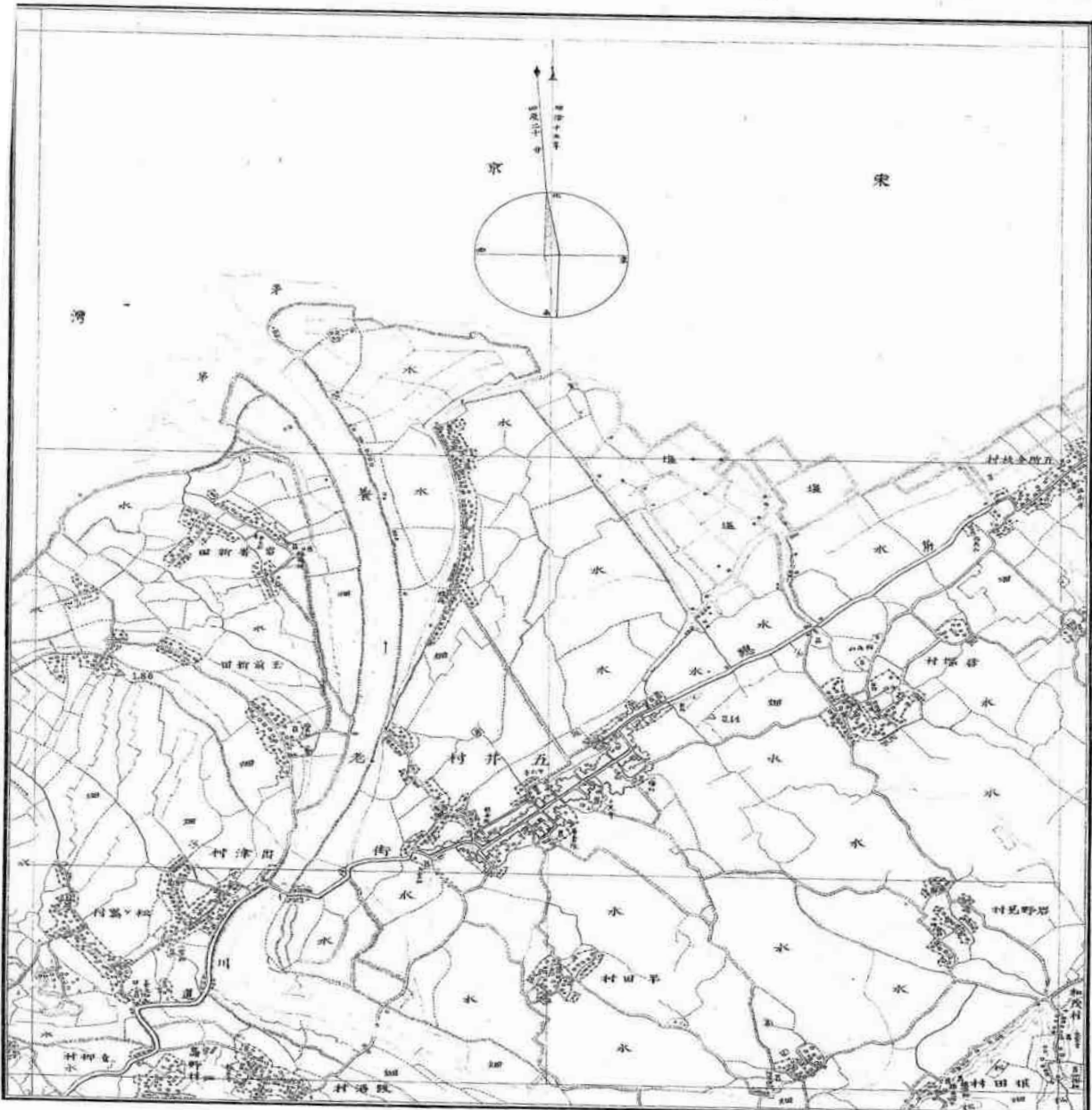
また昭和30年7月1日に市原村加茂・根田・惣社及び西広を編入し、さらに同31年9月1日に三和町小折今富、柳原及び西野、十五沢、宮原の一部を編入、また同31年11月25日に三和町引田、神代の一部を編入した。昭和32年県知事からの五井、市原、姉崎3町合併による市制施行の養成を契機とし、紆余曲折を経て昭和38年5月1日に五井・市原・姉崎・市津・三和の5町が合併し、県下19番目の「市原市」となった

1 神原善利基・松

(2222) 折北善瑞南西村五 10

明治15年に作成された五井付近の地図

村井五郡原市國總上縣葉千



第五号第五小割程

第五号第五小割程(文)

第五号第五小割程(文)

尺、壹分百二

離距等、宋五

第五号第五小割程(文)

岩野見 (いわのみ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 岩野見神社・自性院 (真言宗豊山派)

江戸期は岩野見村。江戸初期に五井村から分村して成立。

地名の由来は、「いわ (岩)・の (接続詞)・み (水)」で、石の多い湿地という意味。

岩野見社 (いわのみしゃ) 水神社 (すいじんじゃ)

所在地 市原市岩野見439番地

創建時期 不詳

祭神 水波女命

神紋 水の字

宮司 時田 克男

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。

境内に富士塚、稲荷神社 (倉稻魂命) がある。

水神社の拝殿の建物



神社入り口の鳥居と参道



神社の本殿の建物 (右側)



富士講の供養石碑と鳥居



拝殿入口と上部の神社扁額



稲荷神社の鳥居と石祠



境内入口付近に祀られる庚申塔

自性院 (じしょういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市岩野見503番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 直井 あずさ

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。市原郡四国八十八か所霊場の76番札所となっている。境内には、従軍殉職者の慰霊碑が多く祀られる。

自性院の本堂の建物





本堂の正面と入口



境内入口の霊場案内石碑



地元出兵の殉職者の慰霊碑

岩崎 (いわさき) 神社・寺院・史跡文化財・城址 巖島神社・稲荷神社・

江戸期は岩崎新田。里伝によると貞享以前(1684年~1688年)は岩崎と呼ばれていた。当初は五井村の属地であったが、享保12年(1727年)に江戸の下村清兵衛により開発され「清兵衛新田」と呼ばれていた。のちに岩崎新田と改称される。

地名の由来は、「石崎」で、石の多い岬という意味。

巖島神社 (いつくしまじんじゃ)

所在地 市原市岩崎2丁目12

創建時期 宝暦12年(1762年)に創建。

祭神 市杵嶋姫命

宮司 時田 克男

由緒・伝説 稲荷神社の末社で、通称弁天様。
宝暦12年に当村の中村次郎右衛門が
自己資金で創建した。平成16年

(2004年)共有の寄付により再建。境内に浅間神社(木花咲耶姫命)がある。

巖島神社の拝殿の建物



境内入口の鳥居と参道



本殿前に建つ第2の鳥居



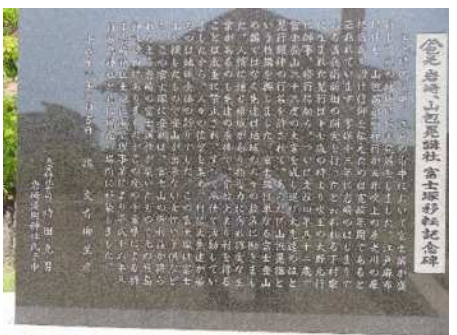
本殿の入口と上部の扁額



浅間神社の鳥居と石祠



手水舎の左脇に古来の手水鉢



富士講などの移転記念碑

稲荷神社 (いなりじんじゃ)

所在地 市原市岩崎1丁目36-5
 創建時期 享保13年(1728年)に創建
 祭神 倉稻魂命
 神紋 抱き稲束・左三つ巴
 宮司 時田 克男
 由緒・伝説 旧村社。当地は享保13年に武蔵国江戸人の

稲荷神社の拝殿建物



下村清兵衛が開墾し、「清兵衛新田」と呼ばれた地で、本村共有の寄付により創建された。天明4年(1784年)に再建。平成17年(2005年)に土地区画整理事業により遷宮。境内に八雲神社(建速須佐之男命)・子安神社・水神宮がある。



境内に建つ石の鳥居と狛犬



拝殿の正面入口と上部の扁額



本殿(左側)と幣殿(中央)



水神社の鳥居と社殿と祠



神社拝殿内部と祭壇・神輿



出羽三山詣での供養塚

君塚 (きみつか) 神社・寺院・史跡文化財・城址 稲荷神社・白幡神社・明光院(真言宗豊山派)
 君塚城址

江戸期は君塚村。地名の由来は、治承4年(1180年)の石橋山の戦いに敗れて房総半島に逃れた源頼朝が、当地で千葉介常胤の迎えを大変喜んだので「喜見塚」と呼ばれるようになったという伝承がある。また当地は初め武松郷と呼ばれ、日本武尊を祀る「武の塚神社(たけるのつかじんじゃ)」があったが、頼朝が武運長久を祈願して白旗を奉納し、以後「白幡神社」となったという。地名や神社名に「塚」着くのは、当地に古墳があることにちなむ。他の由来として「きわ(際)・み(辺)」の転訛で、海沿いの地を指したものの。

稲荷神社 (いなりじんじゃ)

所在地 市原市君塚1丁目28-23
 創建時期 永正6年(1509年)に創建
 祭神 倉稻魂命

宮司 時田 克男

由緒・伝説 旧村社。永正6年に権少僧高成より稲荷神社への本地は、十一面観世音なりとの識文に上総国市原郡武 埜郷君塚とある。

享保14年（1729年）贈正一位稲荷大明神と号し、明治3年（1870年）稲荷神社に改称。

昭和20年（1945年）火災の為本殿 拝殿・神輿その他を焼失したが再建する。

境内には浅間神社（木花開耶姫命）・大杉神社（大杉姫命）・疱瘡神社（大山咋命）・八坂神社（素盞鳴命）・榛名神社（大山咋命）・金刀比羅神社（金山彦命）・道祖神社（猿田彦命）がある。

稲荷神社の拝殿の建物



稲荷神社境内入口の鳥居と参道



拝殿の入口に飾られる扁額



本殿の社建物と幣殿（中央）



大杉神社、疱瘡神社等の祠



その他の境内に祀られる石祠



浅間神社の石祠

白幡神社（しらはたじんじゃ）

所在地 市原市君塚5丁目24-15

創建時期 不詳

祭神 大日武神（現在は日本武尊）・右大将頼朝

宮司 時田 克男

由緒・伝説 日本武尊が東征の際、休憩した際に塚に杖を立てて置いたことから「武ノ塚神」と称し、部落を武ノ郷と称した。その後、源頼朝が尊の史跡と聞き、白旗を奉納して戦勝祈願し、随従武士も収めた矢などがあったが、文政9年（1826年）に火災で焼失したという。

その後、頼朝は当地で千葉常胤一族二百騎の参向を得たので大いに喜び、武の塚大権現は「白



君塚の白幡神社の本殿の建物

幡大明神と呼ばれるようになり、その後「白幡神社」と改称された。



神社境内入口の鳥居。左奥に本殿



白幡神社の本殿社の右側



本殿社の正面写真

光明山明光院 (こうみょうさん みょうこういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市君塚1丁目26番地3
 創建時期 安土桃山期(信長・秀吉)の創建
 本尊 不詳
 住職 田中 譲二
 由緒・伝説 創建時期、由緒不詳。山門の左右に阿吽仁王像木像が安置されている。現在の本堂は昭和60年に建立され合わせて山門の修復も行われた。市原郡四国八十八か所霊場の75番札所になっている。

明光院の本堂建物



神社境内の入口の寺標柱



境内に建つ山門と左右の仁王像



本堂の入口と上部の扁額



山門の右側にある宝篋印塔



山門右手前に石地藏と石仏



本堂建立の祈念の石碑

君塚城址 (きみつかじょう)

所在地 市原市君塚

築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 君塚城址は、八幡御所の1km西南で、岩野見城の1km北側にあった。

住宅街の真ん中にある明光院のある一帯が「堀ノ内」と呼ばれており、ここが「君塚城」の跡と思われる。しかし、市街化が進んでいるために、遺構らしいものは残っていない。

それでも南側を除く三方向には水路が通っており、ここがかつての水堀の名残があると思われる。南側には水路の区画は見られないが、「木戸口」と呼ばれる地名があり、それに沿って南側にラインが存在していると想定できる。これによって囲まれた1方150m程の区画が君塚城の範囲と思われる。城址の北側には「武の下」(館ノ下の転訛)、北東側には「馬場」という地名があり、城に関する施設が存在していたことが伺える。



五井 (ごい) 神社・寺院・史跡文化財・城址 大宮神社・若宮八幡神社・稲荷神社・阿波須神社
 龍善院・養善院・千光寺・徳修寺(真言宗豊山派)・守永寺(曹洞宗)
 天理教市原分教会・小倉家住宅(市文化財)・五井新田祭囃子(市文化財)

創立の時代ははっきりしませんが、君塚と同じ武松郷の字名でしたが、「刀工宗近」が五基の井戸水で名刀を鍛えた為古くは「御井・後井・五位」などの文字が混用されていた。のちに「五井」に統一され、五井村誌に「天正18年(1590年)8月1日に徳川家康公が関東を領するに及び、同年8月1日に御家人の知行となった。同年に松平家信が五井五千石を賜る」と記述が残っている。江戸と安房を結ぶ開運・陸路の交通の要所として、八幡、姉崎と並び「海岸三町」称され栄えた地です。

大宮神社 (おおみやじんじゃ)

所在地 市原市五井中央南1丁目20-
 創建時期 景行天皇の時代(西暦90年代)
 祭神 国常立命・天照皇大神・大己貴命
 宮司 時田 克男
 由緒・伝承 社伝によると、大宮神社の社名は広大な境内に由来し、鎮座は景行天皇の御代、日本武尊が東征された際に、弟橘姫の霊を慰める為と、今後の旅の安全を祈願して創建されたという。

大宮神社の拝殿正面



その後、治承4年(1180年)に源頼朝が当社を参詣し、奉幣祈願をしたという。また、小田原の北条氏が戦勝祈願の為に大刀一振り(一振り)を奉納している。江戸時代には開運・殖産農業・漁業の守護の御神徳により、近隣28村の総鎮守として庶民の信仰を集めている。



神社境内入口の鳥居と長い参道



神社の本殿(右)と拝殿(左)



拝殿内に祀られる祭壇



境内に祀られる子安神社



天満社の鳥居と社殿建物



日枝神社など6社を祀る社殿



浅間神社の鳥居と奥に祀られる祠



祓戸神社の鳥居と石の祠



正面入口第2鳥居の神社扁額

若宮八幡神社 (わかみやはちまんじんじゃ)

所在地 市原市五井5024番地

創建時期 貞観年間(859年~877年)に勧請。

祭神 大佐佐気命

宮司 時田 克男

由緒・伝説 旧村社。貞観年間に勧請という。治承4年

(1180年)に源頼朝が安房国より上総を経て東上の際に、千葉常胤と一族の者が当社の前で頼朝を迎え、戦勝祈願をしたと言われている。永正3年(1506年)に鉄製の牛頭天王像が境内末社に寄進された。昭和62年(1987年)子どもの火遊びにより出火し焼失、翌年再建された。明治44年(1911年)水神社(字水神:水波能売命)・大六神社(字大六天:皇産霊命)を合祀。境内に子安大神(伊佐那美命)・疱瘡守大神(武速須佐之男命)・羽黒神社・浅間神社・祓戸大神が祀られている。



若宮八幡神社の拝殿正面と狛犬



境内入口の鳥居と奥に社殿



本殿(みぎ)と幣殿・拝殿(左)



近年奉納された手水舎



拝殿正面入口と上部の神社扁額



拝殿内部に祀られる祭壇



境内には浅間神社も祀られる



日枝神社の鳥居と社殿祠



天満社の鳥居と社殿祠



子安神社の石祠と社

稲荷神社 (ふきいなりじんじゃ)

所在地 市原市五井6449番地
 創建時期 享保13年(1728年)に勧請。
 祭神 倉稲魂命
 宮司 時田 克男
 由緒・伝説 享保13年に有馬家の代官・栗原市之右衛門が湊新田(現在の川岸)に勧請。江戸御上館の稲荷と同号の幸稲荷・富貴稲荷と呼ばれた。境内には、菅原神社なども祀られる。

富貴稲荷神社本殿の



境内入口の鳥居と扁額



本殿前に建てられた山門と囲い



浅間神社や子安神社を祀る祠

阿波須神社 (あわすじんじゃ)

所在地 市原市五井3389番地
 創建時期 治承4年(1180年)に勧請。
 祭神 阿波須権現・天比理刀咩命とも言われる。
 宮司 田中 克男
 由緒・伝説 通称「あわすさま」という。治承4年に源頼朝が安房国より上洛の際に、同年9月に当所に阿波須権現を勧請し武運長久を祈られたという。時に岡崎某が公を失い追慕の情止み難く陸路より公の行方を追跡したところ、図らずも当所阿波須権現の森林中において会見することができたという。宝治元年社殿を改造。その後建武2年から宝暦元年までの400年間に5度の社殿改造を施され、近年に入り明治34年9月29日に改造。現在の社殿は、昭和60年に新修造された。境内に浅間神社が祀られている。

阿波須神社の本殿建物





境内入口の鳥居と扁額



境内に祀られる浅間神社と鳥居



昭和17年に奉納された狛犬

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市五井4646番地
 現在は五井東3丁目9
 創建時期 寛政年間に斎祀したという。
 祭神 素盞鳴命
 宮司 時田 克男
 由緒・伝説 創建年代不詳。通称おくまんさま。
 口碑によると寛政年間(1789年)以前に、櫛御氣野命を斎祀していたという。

熊野神社の本殿建物



神社入口に建つ鳥居と石碑



本殿の入口、上部に寄付者名



本殿建物を右側から写す

大宮山八大寺龍善院 (おおみやさんはちだいじりゅうぜんいん) 真言宗豊山派

所在地 市原市五井2753番地
 創建時期 不詳
 本尊 不動明王
 住職 藤田 雅之
 由緒・伝説 室町時代に創建された寺院と思われるが火災などで資料はない。境内には動物供養堂や弘法大師堂、水子・子安地藏などがある。市原郡四国八十八か所霊場の84番札所。



龍善寺の本堂の建物と燈籠



境内入口の山門



本堂入り口と上部の扁額



弘法大師堂の建物



動物供養観音の納まるお堂



水子・子安地藏尊のお堂

心光山医王寺善養院 (しんこうさん いおうじ ぜんよういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市五井5254番地
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 直井あずさ
 由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。昭和54年4月に
 区画整備事業の為、現在地に移転した。
 市原郡四国八十八か所霊場の82番札所。

善養院の本堂の建物



善養院の入口の山門と記念碑



境内に建てられるお堂



鐘楼と釣り鐘

本経山千光寺 (ほんきょうさんせんこうじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市五井中央西2丁目11-12
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 田中 譲二
 由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。
 市原郡四国八十八か所霊場の85番札所。

千光寺の本堂建物



千光寺の境内入口の寺門



千光寺の本堂入口



境内に建つ閻魔堂

光明山清昌院守永寺 (こうみょうさん せいしょういん しゅえいじ) 浄土宗

所在地 市原市五井中央西2丁目21-1
 開創時期 養老年間(奈良時代)と言われる。
 本尊 不詳
 住職 石川 博丈
 由緒・伝説 養老年間に行基菩薩の開山により

守永寺の本堂建物と燈籠



光明寺と称した。その後、慶長13年(1608年)1月に五井城主・松平家信の母君「伝通院殿」の御真像と御位牌を安置し御追孝の為に、京都知恩院より松風靈巖大和尚により中興開山され「理安寺」と称して、五井、古屋敷(現在の五井駅前)にあったという。後に天領となり、領主神尾五郎太夫守永の統治することとなったが、明暦3年(1657年)の振袖火事の際に江戸屋敷も焼失したので、理安寺の本堂を江戸に移し屋敷とした。ところが、毎夜奇異なことが起こり、しかも翌年の万治元年(1656年)に領主の正室が死亡したため恐れをなし、当寺沼地であった現在の地を埋めて清昌院殿の菩提寺として理安寺を再建し、墓所・位牌を安置して守永寺と改称した。

その後、大正6年9月の暴風雨により本堂・庫裡ともに倒壊したが、翌年6月に16世好誉円照上人の中興により再建された。さらに昭和47年3月には、五井地区の都市計画事業により区画が変わり、それに合わせて本堂及び庫裡を鉄筋コンクリート建てに再建された。墓地も本堂裏に移転され、現在に至る。

明治時代となって、本堂は五井小学校の仮校舎となり利用された。



守永寺の境内入口・奥に本堂



松平家信の母の供養塔と歴代住職の墓地



歴代檀家墓地の墓石群

天理教市原分教会 (いちはらてんりきょうぶんきょうかい)

所在地 市原市五井中央西2丁目16-7
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 安川 俊人
 由緒・伝説 由緒・伝説不詳

天理教分教会の入口



小倉家住宅 (市原市指定文化財)
 所在地 市原市五井4898番地
 所有者 個人所有
 種類 建造物
 説明 間口8間、奥行3間半の寄棟造り
 木造平屋建ての民家。
 同家に残る記録から享保9年(1724年)に建てられたことが分っており、土間・居間・寝間等に建築当初の柱が残る為、当時の間取りが復元することができる。五井の旧街道に面した側の屋根に見られる「かぶと造り」は、千葉県下の街道沿いにかつて多く見られた工法で、この建物はその中でも古い例に属します。

文化財に指定の小倉家の建物



※ 個人所有の住居ですので、訪問・邸内へ入る場合は、所有者の承諾を得てください。

五井新田祭囃子 (ごいしんでんまつりばやし) 市原市指定文化財

所在地 五井地区
 所有者 五井新田囃子保存会
 種類 無形民俗
 説明 五井にある大宮神社の秋季大祭(11月3日)に演奏されている祭囃子です。葛西囃子の系統を引く五囃子で、明治初期に地元の青年たち(若い衆)が、葛西砂町から伝習してきたものと言われている。当初は、「春のあんば様の祭」で演奏されていた。曲目には「切りばやし」「シンデンばやし」「鎌倉がやし」「シチョウメばやし」「ニンバばやし」「岡崎」などがある。



玉崎 (たまさき) 神社・寺院・史跡文化財・城址 稲荷神社・阿弥陀堂

江戸期は玉前新田。宝暦9年(1759年)に幕府領代官・吉田源之助が養老川河口の洲を開発して成立した新田村。はじめは見立新田と称したが、後に玉崎新田と改称された。

地名の由来は、近くの海岸で「タマ(珠貝)」採取していたことにちなむという説がある。

「たむ(河の曲流部)・さき(前)」の転訛で、養老川の曲流部の前に位置する事か。

稲荷神社 (いなりじんじゃ)

所在地 市原市玉前136番地
 創建時期 宝暦9年(1759年)
 祭神 倉稻魂命
 宮司 時田 克男
 由緒・伝説 旧村社。宝暦9年に代官の吉田源之助が勧請。境内に天満社(石祠)・八雲神社(石祠)・松尾神社(石祠)・大六天神社(石祠)が祀られる。

稲荷神社の拝殿正面



境内の鳥居と燈籠・狐の石像



浅間神社の鳥居と石祠



大六天神社など4社の祠



本殿建物(左)と幣殿と拝殿



拝殿入口と上部の彫物額



参道には奉納の狐の石像・灯籠

玉崎阿弥陀堂 (たまさきあみだどう)

所在地 市原市玉崎91番地1
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 不詳
 由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

阿弥陀堂の本堂建物





阿弥陀堂の正面入口



阿弥陀堂と書かれた扁額



文化年化の刻みのある墓石

出津（でづ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 八雲神社・神光寺（真言宗豊山派）

江戸期は出津村。五井村の枝郷。

地名の由来は、天明年間（1781年～1789年）の大雨で養老川の流路が変わり削られた田畑が堆積し大きな洲が出来た。その洲が養老川の先にあった事から「出洲」となり、「出津」に変化した。後に人が移り住んだという。

八雲神社（やくもじんじゃ）

所在地 市原市出津102番地

創建時期 慶長年間（1596年～1615年）

祭神 素戔鳴命

宮司 時田 克男

由緒・伝説 旧村社。通称天王さま。慶長年間に創建。

神事は旧暦2月7日に春祈禱がある。

神符を交換し境内の樹木の皮を持ち帰る神事があった。

境内に菅原神社（菅原道真）・稲荷神社（倉稲魂命）・子安神社（櫻大刀子神）・浅間神社（木花開那姫命）：石祠）・水神社（弥都波比買命：箱宮・道祖神（八衛比古命）がある。

八雲神社の本殿の建物



境内入口の鳥居と参道



本殿の入口を写す



八雲神社の社務所建物



祓戸大神の鳥居と石祠



郭神社の祠を納めた建物



境内に祀られる庚申塔

祇園山 神光寺（ぎおんさん しんこうじ）真言宗豊山派

所在地 市原市出津93番地
創建時期 天平年間（729年～765年）に開山
本尊 不詳
住職 藤田 雅之
由緒・伝説 天平年間に行基により開山された。
市原郡四国八十八か所霊場の66番札所。

神光寺の本堂建物



境内入口で右は墓地左は神社



境内入口の地藏仏群



本堂手前にお堂

平田（ひらた） 神社・寺院・史跡文化財・城址 大宮神社・長福寺（真言宗豊山派）

江戸期は、平田村。地名の由来は、「ひら（傾斜地）・た（処）」で、傾斜地という意味。

大宮神社（おおみやじんじゃ）

所在地 市原市平田842番地
創建時期 天平元年（729年）に創建。
祭神 国常立命
官司 時田 克男
由緒・千節 旧村社。貞永元年（1232年）に北条氏家臣外記倉鞠負、出雲早水、図書数馬等の諸氏が当地を参着し奉斎している。棟札に天平元年とあり、棟木に宝永4年（1707年）8月に再建とある。また建保元年（1213年）に三宅満之助というものが熊野権現を勧請、田村右京之進が山王権現を勧請している。のちに熊野権現を熊野神社山王権現を日枝神社と改称し、大宮神社の境内へ遷座した。境内に天神社がある。

平田大宮神社の本殿正面



境内入口の鳥居と紫陽花の参道



本殿の入口と上部彫刻欄間



本殿の内部に祀られる祭壇



浅間神社の鳥居と石祠



熊野神社の石祠



天神宮の石祠

長福寺 (ちょうふくじ) (真言宗豊山派)

所在地 市原市平田 1178番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 藤田 雅之

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。

市原郡四国八十八か所霊場67番札所。

長福寺の本堂建物



長福寺境内入口の門



本堂の建物の正面入口



長福寺本堂内部の祭壇



境内に祀られている石仏



境内入口にある札所案内

入口左にある庚申塔の石塔

-*



村上 (むらかみ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 白幡神社・永昌寺 (曹洞宗)・諏訪神社
観音寺 (真言宗豊山派)・村上城址

上総国府推定地の一つ。戦国期に村上の地名があった。江戸期は村上村。地内には大永年間(1521年～1528年)に村上大蔵大輔義芳が居たという村上城があった。慶應4年(1868年)の戊辰戦争の際には、観音寺に幕府軍100人が立て籠もり官軍に応戦したが敗走した。同寺は官軍に放火された。地名の由来は、「もり(盛)・かみ(上)」の転訛で、高くなった所と言う意味。

白幡神社 (しらはたじんじゃ)

所在地 市原市村上1097番地2

創建時期 不詳

祭神 日本武尊・源頼朝

宮司 時田 克男

由緒・伝説 創建年代不詳。北拝。諏訪神社末社。伝承によると、源頼朝が村上で一夜を明かした記念に松を植え、白旗の松と称したという。後に世村人が頼朝を追慕し、当神社を建立したという。館山道建設の為、現在地に遷座した。

村上白幡神社の本殿建物



館山道側道脇に遷座された神社



境内に建つ鳥居、右奥に本殿



柵塀に囲まれた本殿と狛犬



境内に祀られる子安神社



境内に奉納された手水舎



白幡神社の社殿移設の記念碑

福聚山青漣院観音寺 (ふくじゅさんせいれんいんかんのんじ)

所在地 市原市村上1384番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 直井 あずさ

由緒・伝説 創建時期不詳ながら、延文3年(1358年)に源邇上人が法流開山とあり、江戸期には幕府より寺領7石3斗の御朱印状を受領している。市原郡四国八十八か所霊場の81番札所。戊辰戦争の時に、幕府軍百人が立て籠もり官軍と戦ったが敗走した。その後官軍により放火され、本堂などは焼失した。

真言宗豊山派



再建された観音寺の本堂の建物



観音寺入口の寺標・右が本堂



右が宝篋印塔、左奥に鐘楼



無縁墓石を集めて祀られる墓石

村上 永昌寺 (むらかみさん えいしょうじ) 曹洞宗

所在地 市原市村上1421番地

創建時期 応永15年(1408年)に創建

本尊 不詳

住職 大澤 弘一

由緒・伝説 当寺は、応永15年9月に村上民部大輔清次により建立、明岳和尚の開山という。
江戸幕府より寺領10石の御朱印状を受領。
明治9年には、村上尋常小学校の校舎に使用されている。村上氏の位牌がある。



永昌寺の本堂の建物正面



境内の無縁墓石

本土の右側を写す



村上城址 (むらかみじょう)

所在地 市原市村上字堀ノ内

築城時期 大永元年(1521年)

築城主 村上大蔵大輔義芳と言われている

説明 この場所には「村上氏」が居住しており、それで「村上」という地名となっている。村上氏は信州出身でこの地に来たのは古く、鎌倉時代の宝治合戦(1247年)後で、足利氏が上総守護になってからの事で、足利氏の被官であった村上氏もそれに伴って移住してきたと思われる。



その後16世紀になると、村上氏は小弓公方に従っていたが、小弓公方が滅亡後は原氏らと共に北条氏に属したという。おそらく椎津氏らと同様、上総地方の在来勢力として里見氏の北上を食い止める役割を担っていたと思われる。

村上城は、村上駅の西側にあった。ちょうど、駅と国府小・観音寺・永昌寺に囲まれた場所になる。平城で、城址は宅地化されているが、周辺にあったと思われる水堀は水田となり、土塁や水堀の一部が残っている。永昌寺には、村上氏の位牌が残されている。



堀ノ内から東側を見た処で
地形が城址のように見える



永昌寺境内に残る土塁



宿地区の東側の水堀跡の水田

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
- ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
- ・全国遺跡報告総覧
- ・日本の城郭・城址（千葉県版）
- ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
- ・市原市・宗教法人一覧
- ・市原の城郭と国府跡をたずねて
- ・Wikipedia- 市原郡
- ・市原市歴史と文化財シリーズ
- ・いちほら歴史の旅人

・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

国分寺台地区の地名の由来と史跡文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113

本資料をコピーする場合は、**ふるれんネットのいちまる館**をご利用下さい。